

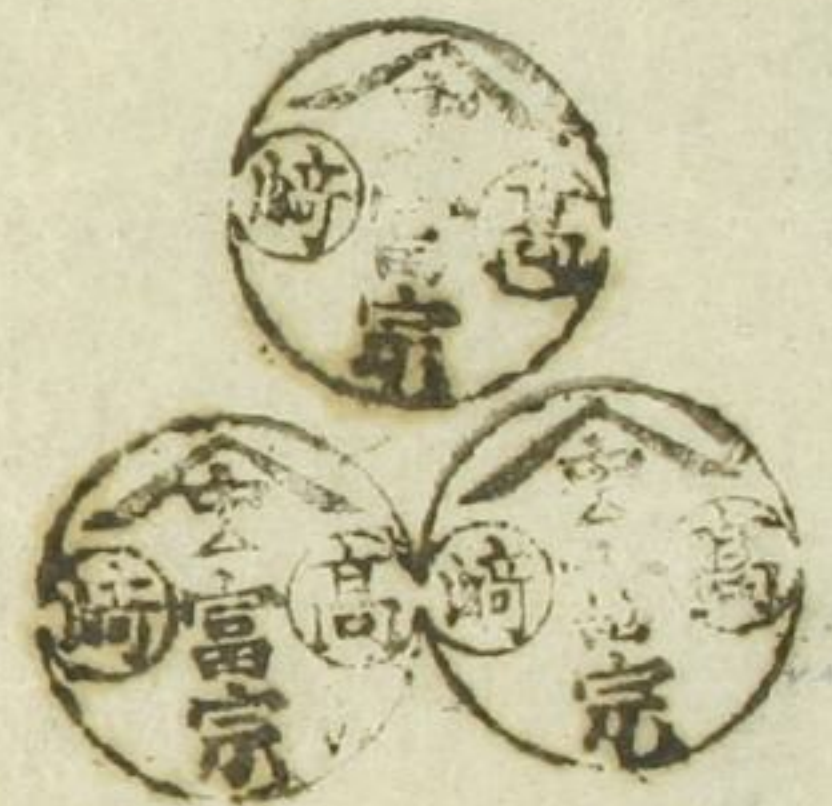
沼尻絳一郎編輯
西南鎮靜記

初号

下

貳

A 447
2



48-7807

西南鎮靜記初編卷之下

東京 沼尻絳一郎編輯

第二回

伊藤八十義の為小屠腹を
并不動ヶ淵野津中奮戦

却説人吉の既入陥り都城もはる官軍の有と
るる逆徒の曩は鹿兒島の根據を官軍の為
み占有せられしより假し日隅の間は割據し
更み郷士土民を煽動して豊後を撃て出

西南鎮靜記

初編下

も又猛威を十分不奮ふに至らず重岡不退
き漸々延岡は遁走せりと進取の策はすであ
斯目的を失ひたり根據を固守しつゝ持重の畫
策をなさんとするふ日隅二國を鎖して守
らんは逆將の意も恐らくは十分ならざ
るべければ今や全力をりつて鹿兒島を復
せんと計らんも知るべからず是は依つて官
軍の鹿兒島に駐在せらるゝ哨兵を四方に

配り警備を内外に嚴ふ一藩を焚き柵をふ
り守備残るところをけきば敢て輕々しく攻撃
の手を下さず唯周圍の山上は砲壘を構へて
時々發射するのそりといふ然もとも逆兵が
今日の勢ひたる對峙して官軍の倦を待りの
ふあらずして必ずしも他は變動の起るもの
あらんと願ふことの或ひは人吉以下の兵が
一緒に試さんとするふ所べきなり時炎熱

の候^{こう}にありける官軍^{くわんぐん}の勞^{ろう}に實^{じつ}に幾^{いく}なりあるを知ら
ずと人々とも我^{われ}も又肥^ひ豊^ひを鎮^{ちん}定^{てい}する兵^{へい}を以^{もつ}て
前^{まえ}を壓^{おさ}へ城^{じやう}下^げの逞^{てい}兵^{へい}を發^{はつ}して降^{くだ}るものを先^{せん}
鋒^{ほう}と一^{いつ}抗^{かう}するものを逐^お走^{そう}りて一^{いつ}舉^{きよ}に諸^{しよ}賊^{ぞく}と
挾^{けつ}撃^{げき}し西南^{せいなん}の一隅^{いつこく}を掃^{さう}攘^{じやう}せらるるの日^ひに將^{まさ}
小^こ遠^{とん}きふあらざるべしと
蓋^はし茲^{ここ}に肥^ひ後^ごの戦^{せん}地^ちふありし官軍^{くわんぐん}の態^{たい}と指^さ
揮^き旗^はの体^{てい}と七種^{しちしゆ}ありて用^{もち}ひられたるに逆^{ぎやく}兵^{へい}

が是^{これ}に模^も擬^ぎて七種^{しちしゆ}の旗^{はた}を用^{もち}ひしより一時^{ひととき}大^{おほ}に
官軍^{くわんぐん}を惑^{まど}はしたり茲^{ここ}には兇^{きやう}徒^との山^{さん}間^{かん}に有^あ
るものと雖^{なほ}も軍鑑^{ぐんかん}の景況^{けいけい}を懸^{けん}念^{ねん}し戦^{せん}地^ち近^{きん}海^{かい}
に投^な錨^がする船^{せん}敷^し等^{とう}を聞^きんと欲^{ほつ}する体^{てい}なるに
彼^{かれ}は軍鑑^{ぐんかん}の備^{そな}へるきと兵士^{へいし}の出張^{しゅちやう}軍器^{ぐんき}の分^{ぶん}
遣^は等^{とう}の速^{すみ}うらうらふは毎^{まい}々^々意^い外^{がい}の失^{しつ}敗^{ぱい}を取りし
事^{こと}あるを以^{もつ}てのちあるらん過^する五^ご月^{げつ}中^{ちゆう}水^{みづ}股^{また}
口^{くち}の戦^{せん}ひは逆^{ぎやく}徒^との一隊^{いちたい}長^{ちやう}内^{うち}村^{むら}其^{その}内^{うち}に敗^{さい}卒^{そつ}を

鼓舞―彈丸雨の如くその砲声空は轟き恰も
萬雷の落るも斯やとあやまる其の黒烟の
隙をを潜り奮撃突戦―遂に身は七ヶ所
の銃創を負ひ退きうゝ轉倒―もる我
生擒んと近づけば腰こそたぬ刃を揮て其
勢ひ悍く勇進猛烈るるもぞ流石の官兵も
千變万化に戦ひ―終に内村の官兵の猛き
勢ひに敵―がとく―て引退うんとすもど數

ヶ所の傷み進退自由とるさず官軍双方より
戸板をりりて取押へ難るゝ本營へ抱引―医
員は托―て懇に薬用をば勸奨れど彼いつ
るに聞入らず穢ら―き敵の薬死するとして用
ひんやと飽まで頑固と言募りて酒あるを一
杯呉れよと大声ふて呼ひるもぞ汝賊兵薬を
穢―ハ―といひるが何とて酒を請求るや
薬も酒も官軍の恵み出る品るゝと詰れ

賊徒内村官
 軍の病院ふ
 あつて大酒
 と好む



ハ逆徒ハ倍々怒リて暴言とさへ言ひつのも
ハ将校ハ是と制し漸次官の惠とりて
悔悟さするゝ如ハ望の通り酒をあへ
て先づ其のろろと慰めよとやぐて數杯と興
ふるを物の見事ハ大酒し打悦び飲たり
一ハ重傷のちゑみやその座ゝたへず倒れ声
と放ち詩と吟トて其儘此場ゝ死せしと
は馬見原ハ堀江中佐ガ兵卒と引率し

五月二十二日ハ戦争の景況ハ官軍左翼ハ
充分ハ進入し室柳ハ設け逆徒の焚出し
場を取り續てハヅナ越の山上ハ上り男山の
遙背後ハ出で三田井街道ハ接するを以
て逆兵此の街道と通行するこ能ハず然
るゝ地理ハ亦頗るありさゆゑ男坂の壘を
抜くを得ずより更ハ男山の兵を増加し
て男坂の壘と抜んと為したまども兵寡

少とめりく目的を達するあをなほ遂ふ午后
第五時五十分より各地の兵を引揚げて前位
に復す此の戦争に逆徒の死傷五人即死あり
生捕二人小銃二挺あり官軍に傷を蒙る
もの第一旅團は二名あるのみして他は異
事なり六月十六日徴募巡査の編入が六百
七十人は是へ宮城及び岩手、埼玉、山形などの
人々のより懐く戸所芳泰の三等少警部より

後藤勝利貞、高橋直治の警部補心得るら
れ此外尚昇等が五十九人又青森縣の九
等警部柴田庫太郎外巡査九人の御用ふ
て同日東京へ着し各縣より又追々徴募に
より警部巡査千人餘り同十八日午前
十時より安藤中警視と千坂少警視が西
九下の営所より引率され麻布六本木の旧
櫓郎の新撰旅團第一大隊の営所へ引き

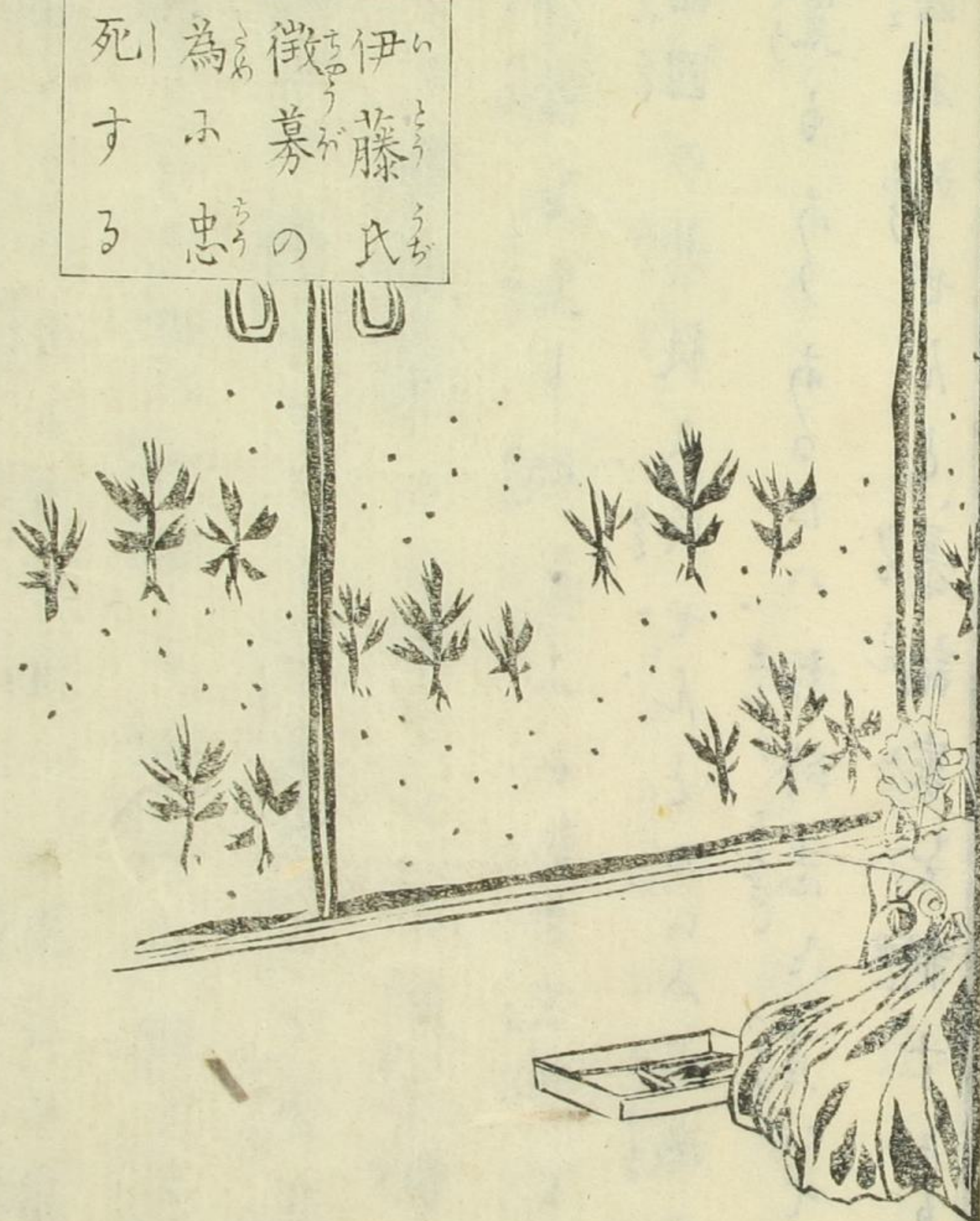
警部巡查もよく其指揮に應じて
入營せしと

茲に新潟縣下越後の國高田の徵募巡查
が多人數東京へ着せしが是は一回の物語
あり抑西南の逆軍數月と踰て未だ鎮定
せず官兵の夥多きも現に豊後、肥後、薩摩
の三国に亘り戰場もはと廣きふより各縣
に募りて多くの巡查と徴するに越後高田

の舊藩士族の有志のものと徴するに縣廳
より命ありし同縣士族のその中にて人望
ありし伊藤八十本年四十六舊藩士族と集會せ
しめ大義名分のあるところと説て方今士
族の丁壯に此の徵募に應じし人民を保護
し乱賊を退ぞけて義務の十分と尽すべ
き旨と懇ろに諭せしうバ各々實にものと
承伏して多人數徵募に應ぜしうバ伊



伊藤氏
徵募の
為ふ忠
死する



藤八十ハ大ニ悦ビ諸士ヲ率ニテ高田ヲ
發一タリ此ノ人常ニ朝廷ノ為メ大功ヲ
立ルノ志一アツク今般數日ヲ重ねテ武州
ミル熊谷驛マデ来リ一ニ多人数ノうち
議論ト生ト徵募スセモ不平ヲ有ク
西國ノ暴徒ニ與センとウリ過激ノ頑固
黨モありあるハ始終志ヲ貫いて飽マデ
國ニ報ゼンと暴論家ヲ制スルモあり

騷擾ニ因ツテ激動ヲ集合順逆ニ有ク
沸騰一方アリざるニ伊藤ハ深く痛心一
正義ノ諸士ト諸共ニ百方説諭ト加ヘレド
モ半ニ伏セズ袖ト拂ツテ此處ヨリ高田ニ
歸ラント頑固ニ募ル多勢ノ紛擾一ト度
徵募ニ應ゼ一身ニテ今更異論ト起セル
ハ各ノためニ信用ト失ヒタル我恥辱ス
デ深く朝廷ヘノ恐怖モあるニ逆徒トス

らんと思ふ輩ハ我ガ死とありて謝するの
のちその方向と定められよ是まで説諭不
數日と費し各とも引率して今東京へ着
する前ハ事の破もと生ぜしも畢竟我ら
拙きゆゑと悟まば聊恨そのあらず斯ても
おのづから従われずやと坐中と見まども多人
數の囂々として一決せず伊藤ハ忽ち一
室ハ退き遺書一通と書置きて腹十文字

ふ檢斬りて正義と貫く忠死の軀ハ遺が
異論の輩も至誠の心膽ハ銘ト各私論と
うち捨て衆意一決徵募ハ應トて過日
東京へハ着せしなりとぞさて伊藤ハ十が
事ハ臨みて死と恐れず誠と貫く義膽
ふ感トて猶おの事跡と尋ねるゝぞ

傳云伊藤氏ハ舊高田藩士にて家祿
二千五百石と領し舊名とハ郎と

呼よまれて文武ぶんぶの道みちふ至いたり深ふかく今日こんにちこ
そ衰おとろへたれど弓術きうじゆつふ至いたりて殊ことみ勝まさ
れて藩中はんちゆう第一等だいいちとうの名なと得えて久ひさく
豪勇ごうゆうとありて聞きこへたり戊辰ごしんの役えきふ
も戦功せんこうありて維新いしん後藩ごはんの大参事だいさんじと
みられたり置縣ちけん以來いらい官途くわんとふつかず
身みと田園でんえんふ委いせられしも人望じんぼうの猶なほ
衰おとろへさり一朝いちやく事ことの爰こゝふあよひ

嘗かうて勇膽ゆうたんとありて志しを顯あらわる英えい
傑けつと失うしなひたるい最惜さいしやくふむべき事ことふ
りけり

既すでふ高田こうた士族しぞくも百四十六人徴募ちゆうぼ巡查じゆんさふ
て六月十四日東京警視本署とうきやうけいしほんしよへ着ちやり神
奈川縣ながわけんの巡查じゆんさ五十人を以て同日同縣の
東九等警部とうきゅうけいぶが引卒ひんそつして午後一時ごごいちじころ
警視本署へ着りたりまゝ神奈川縣

逆徒八百餘
 八脅徒して
 重岡曰杵も
 出張す



西南鎮靜記

初編下 十三



西南鎮靜記

廳より小石川の砲兵本廠へハトロンの紙
と雷管五万發と廻さきたり
儲も去五月中豊後路に暴威を逞しめせ
一逆兵等が戦状を聞よ巨魁ハ野村丑之
助大迫次郎石塚長左工門川北新九郎
と始しめ數輩ふしと惣勢凡八百人餘
は脅從せしめし士族郷士等若干を引
て美々しく大旗と押立てあきりし諸軍を

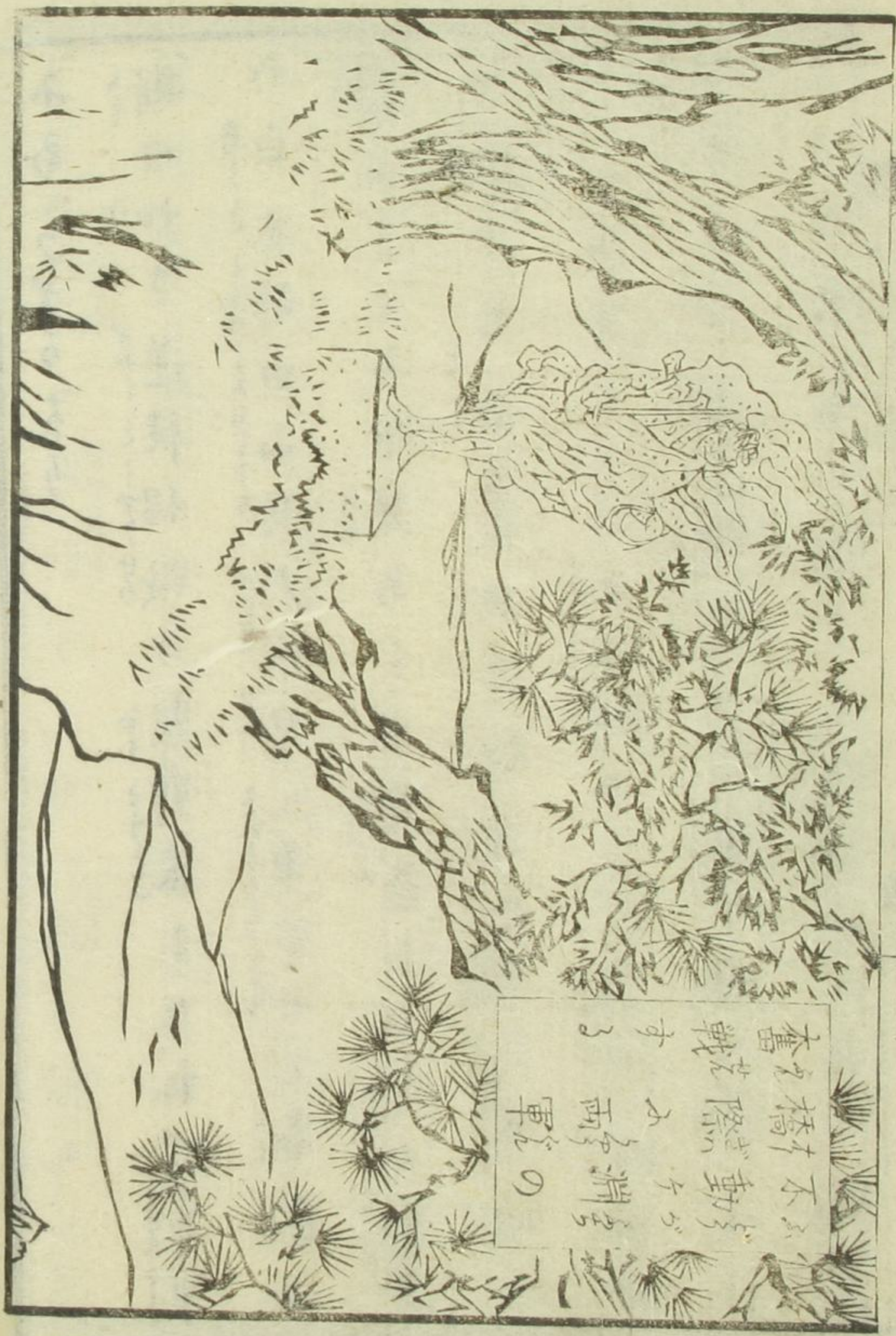
をげまし嘗て軍令をたゞしく六月一日二
時のころより重岡へ出張し直ち白杵
に進入すると聞えしかゝ該地の士族隊と
官軍ハ小隊巡查二百名ハ三重市野津中
野村と城下まで三ヶ所ハ兵を配りし逆
兵ハ勢ハ激烈三重市に進入せしかまち
設けたる此方ハ散兵を以て戦手たり
えんと暫時防戦して支へしところ逆徒

ハ意外いふひニ多勢とぜいなきを官軍くわんぐん二陣にちんの野津のづ
中ちゆうと合併ごうぺいして防ふぐみ如ごとく引返ひきかへすふ
および逆徒ぎやくとをこのとに別隊べつたいよて野津中のづちゆう
面良木めんらぎニ兵へいをまゐりて二陣にちんの不意ふいにう
つて出て攻激こうげき奮闘ふんと一野津中のづちゆうみて戦いくさひ其
砲声ひょうせい山海さんかいを鳴動めいどうす逆兵勢ぎやくへいせいひましく熾さかん
ふーと勇進ゆうしん激烈げきれつなる状ようすへさるる泰山たいさんも
こそが為ためニ碎くずくりと計はかりりニ怪あやしむに至いたる

こそよないて官軍くわんぐん甚しど苦戦くせんみて将士身しうししん
を跳はらうと單身だんしん逆軍ぎやくぐんの群ぐんぐる中ちゆうにせ
入いらんと官兵くわんぷニ号令ごうれいしてその兵氣へいきを励はげま
し千變萬化せんべんばんげニ防戦ぼうせん一此所ここのところを先途せんどうと暫時ざんじ
ハ逐おひつ追おはれつ必死ひつしのところへ三重市さんじゆうの敗やぶ
兵へいり雪顔ゆきがほをうつて崩くづれかゝるニ二陣にちんも又
おもひ誘引きざりれて乙見おとみ、福良ふくらへ敗走たいそうされバ
野村のむらニ構かまへ一三陣さんちんも平場ひらばたの防禦ぼうぎよ覚束おぼつかる

一と不動ヶ淵の橋ぎへは踏駐まりて兵士の精
 神益加つり奮撃突戦呐喊叫んで戦ふふ
 賊へ之を視る大に進撃一疾く神崎陣山海
 添市濱等より城下ふ入り一と安え一かバ
 右往左往は敗走せりゆとより官軍巡查隊も
 寡少の兵にて應援する舊士族等も殊ふ
 事至急は發したまは兵器等も十分あり
 ずその全くの強弱をよの一敗は論ずべき

ありあらざるあり
 斯の如き逆徒猖獗の報到来したれば官軍
 へ白木峠白山口戸次口三重市口と各隊の
 嚮ふところを定められ間道ふも丈夫な砲壘
 と築き海手あり日進艦浅間艦の両軍艦を
 すめ六月九日の正午より海陸同時ふ
 攻撃一逆徒が猶籠り一水ヶ城の背後よ
 りも進撃するたるは逆徒はいよく城よ



不^ふ動^{どう}の^の淵^{ふち}に^に軍^{いくさ}の^の橋^{はし}を^を戦^{いくさ}する^{する}



據集防戦一々遂み泳へり四途路もな
りて狼狽一市ヶ濱に遁がれりるを待ち
設けたる軍艦より烈しく是を砲撃する
ふ佐伯とさうと逃去れば軍艦のまゝと抜
錨してさきよ佐伯ふ赴き？再度逆徒ふ
邀撃大小砲を連發し其の砲声空に轟
き恰も萬雷の落るも斯こそあゝんと計
りよ砲撃するよ備をたつる間隙もるく

こそより勢ひ大ひみ挫折て逆徒山間を遁
れしと續いて官軍各所よ追撃し今鎮定
程るからんとしよと薩徒が戦地もあつ
常み唱ふところとあり

一説ふ徳川の覇業を顛覆して王政復
古の功をたてし全く薩士の太刀風に
靡き従ひしものるを刀剣を廢物と
して士族を居候と呼び食潰しと愚弄

するこそ心得こころえに廢物ちがひものとありー以上いじやうの
我われが身みも刀劍とうけんととりよ有あつて益えきあり
唯ただ快さうよく斬死きりどして士族しぞくの贄物けがれものなる
有用物ゆうようものなるうを知しらるゝめん我われれよ
抗抵者こたへものども共ともに皆首級みなくびふして西郷大將さいこうだいしやう
の賞與しょうよの一言いけんと得えて此このの世よの思おもひ出で
にせんと放言ほうげんするより戦地せんちより歸かへり
ー人の物語ひとものがたりせーともまゝ生擒なまじりれた

る逆徒ぎやくとの暴言ぼうげんを聞傳きくでんへたるものる
るべー

まゝ六月十四日りくごくとにじふにちの山田少將やまだせうしやうの手てみあひ
てハ既すでに田代たしろあむうに進撃しんげきー激戦げきせんなるべ
きをふよびたりー今朝けさあしたも亦またりつて奮撃ふんげき
突戦とつせん為なしたるゝぞ遂ついに砲壘ぱうらいの各所かくしよを
陥おとし入れはゝ大口おほくちも進撃しんげきー攻立せうたて近ちか
寄りーとりーも逆徒ぎやくとを此所このところ彼所かのところの物もの

かげより一々顯へき出で破竹の勢あり
み戦ひあり一官軍み横合より一て撃ち
出しけしを官軍これみ防戦為し暫時
苦戦よあよび各將粉骨細身してその功
最も著しく終に逆徒等敗走為しける
と官軍令して是と追撃散乱せしむる其
の勢ひたゆまば遂に大勝利を得兵士纏
て本營に引上げたりといふ

是より島津父子櫻島の邸より上申
あり續て重岡佐伯と激戦ありつる
譯の第二編に記載すべし

明治十年八月三十日 御届
全 十年九月二十日 出版

第壹大區十四小區

東京堀江町二丁目九番地

櫻井浪次郎同居

茨城縣平民

編輯兼
出版人

沼尻絰一郎

定價廿二錢五厘

萬笈閣製本各地專賣書籍館

江島喜兵衛

東京

北畠茂兵衛 稻田佐兵衛 山中兵衛 小林新兵衛 九家善七 村上勘兵衛 中村佐助 牧野吉兵衛 柳川梅次郎 水野慶次郎

東京

林萬次郎 石川治兵衛 荒川藤兵衛 太田金右衛門 北澤伊八 朝倉久兵衛 青山清吉 鈴木忠藏 山中孝之助 山中北郎

同	同	同	同	駿河	同	同	同	同	同	同	同	同	遠江
	沼津		靜岡	藤枝	掛川	二俣	見附						濱松
小松	吉成	廣瀨	佐藤	淺井	大塚	天井	古澤	白水	一貫	山下	齊藤	松塚	落合
浦	壽三	市	俊	安兵	好五	金	良	健二		仁兵	太兵	聚	清
吉周	郎同	藏同	平同	衛越	郎同	藏同	作同	郎同	社同	衛越	衛同	人同	七同
防山口	四ッ谷濱村	葛塚		後長岡	高岡					中富山			山形
阿部	佐藤	弦卷	松田	中村	車	川上	大橋	中川	守川	土井	中川	平田	市村
準	友	七十	周	作	平次		甚	甚	吉兵	宇三	久	彌平	五郎兵衛
輔	吉郎	郎	平	平	郎	章	吾	藏	衛	郎	助	治	衛

010190508159

